

とならぶ代表的な商品作物で、本邦における商業的農業発展の推進力となった。畑作物の盛衰交替は、明治後半期になると顕著に現われてくるが、それは、桑園の激増と実綿その他の工芸作物および各種の自給作物の減少によって特色づけられる^①。

筆者は先きに、桑園を中心とした作物の組み合わせを指標にとって、明治期における本邦の土地利用の推移について分析した^②。その結果、桑園は時代的には明治後半期に、地域的には東山、関東、東北の各地方において激増したことが明らかにされた。しかし、これは単に土地利用上よりみた桑園景観の発展を統計的に把えたに止まっていた。

本稿では、これを参照しながら、更に、養蚕業の他の部門をも考慮して養蚕地域を決定し、明治期における養蚕地域成立の過程を明らかにしてみよう。

(一) 養蚕地域の設定

一般に、養蚕地域を設定する場合には、桑園面積や養蚕戸数を指標として使うことが多い。農林省では、養蚕農家普及率（全農家中に占める養蚕農家の百分率）五%以上を「養蚕地域」とし、更に、三〇%以上を「主産地域」と規定している^③。これは、時代的には第二次大戦後の養蚕業の衰退期（一九五〇年）に関して、地域的には全国を対象として郡段階の資料に基づいての分析である。又、筆者は、埼玉県の場合には、市町村段階の分析結果を用いて桑園率一〇%以上を養蚕地域とした^④。前者は養蚕業の普及状況を、後者は土地利用景観を指標として設定した類型である。

この二つの指標のうち、どちらを用いたら適当か否かは、対象地域の拡がりや研究目的などによって異なる。

概して、府県又はそれ以下の狭い地域を研究の対象として、市町村段階又はより小地区に分析していく場合には、どちらを用いても結果としては大きな差は生じない。

しかし、全国を対象として養蚕地域を設定する場合には、桑樹の品種および仕立法、年間における桑葉の利用可能期間、桑園の経営規模、蚕児の飼育時期と回数および掃立規模などの地方毎の相違が大きいので、桑園の生産力や養蚕の経営規模の地域差が著しい^⑥。従って、桑園率と養蚕農家普及率が必ずしも平行関係にない。例えば、桑園率のみを指標に用いると、粗放的な立通桑園の多い地方は集約的な根刈桑園地帯よりも過大に評価されるおそれがある。けれど、立通桑園地帯の桑園生産力の低いことが無視されるからである。また、養蚕農家普及率のみを用いると、小規模養蚕地帯が過大に評価されやすい。このようにみてみると、これら二つの指標のうち、いずれか一つだけを用いて養蚕地域を設定することは必ずしも適当ではないように思える。さりとて、これら二つの指標はかなり異質な概念であるから、一つに結合させることにも難点がある。

そこで、別な指標を考えてみよう。元来、養蚕経営の目的は繭の生産にあり、養蚕農家が桑園をつくり、蚕を飼うのは、そのための手段にすぎないのが一般である。従って、養蚕地域を設定するための指標としては、桑園面積（桑園率）や養蚕戸数（養蚕農家普及率）とならんで、いな、むしろ、産繭量の方がより適している筈である。ところが従来は大雑把な設定に、産繭量の絶対額がそのまま使用されてきたにすぎない^⑦。これは産繭量から導かれた比例数のなかに、養蚕の普及発展度を表わすものが簡単に得られなかったためであろう。例えば、桑園一反歩当り収繭量は養蚕業の生産力水準を把えるための良き指標となるが、養蚕地域設定の指標としては適当でない。また、養蚕農家一戸当り収繭量も経営規模を表わす指標となるが、養蚕地域設定の指標としては適当ではない。

^(注)

ところで、養蚕地域を設定するということは、どういふことかというところ、養蚕業の旺んな地域を特別に他から区別することである。この場合、養蚕業が旺んであるかどうかは、量的と質的の二つの方向から把えることが望ましい。量的側面を把えるためには産繭量をそのまま用いることができるが、問題となるのは質的側面を把えるための指標を如何に導き出すかということである。

いふまでもなく、繭生産の基礎は、先ず第一に蚕の飼料としての桑葉の生産にある。しかも、桑葉の生産は耕地の一部または全部を桑園として利用することによって達成される。従つて、或る地域で養蚕が盛んであるかどうかは、単位耕地面積当り収繭量によって判定できる筈である。勿論、耕地はすべての農業生産の基礎であり、水田、普通畑、果樹園、茶園等にも利用されているし、繭は養蚕経営という一農業部門の生産物にすぎず、耕地と繭の間には、複雑な中間項、例えば桑園率、養蚕農家、桑園の生産力水準、育蚕能率などが介在する。しかし、この複雑な中間項が介在するからこそ、逆に単位耕地面積当り収繭量が指標としての妥当性をもつものといふことができる。ただし、これによって、桑園の生産力水準と桑園率の両者を考慮に入れることができ、更に、養蚕経営の目的である繭生産を基礎にした比例数を求めることができるからである。従つて、本稿では、単位耕地面積当り収繭量（耕地面積一町歩当り収繭量）を用いて、質的側面からの養蚕地域を設定していくことにする。以下、これを養蚕業指数と呼ぶ。

(注) 比例数の場合収繭量と呼び、絶対値の産繭量と区別する。

(三) 明治末期の養蚕地域

明治末期の本邦の養蚕地域を設定するために、先ず、一九一〇年次の各府県統計書を利用して、郡別の養蚕業指数

第1表 明治期の養蚕地域に関する基礎資料

郡名	養蚕業指数 (貫)			産繭価額比 (%)	産繭量 (対全国千分比)				桑園率 (%)	桑園反当収繭量 (貫)
	1910年	1900年	1890年	1877年	1910年	1900年	1890年	1877年	1910年	1909年~1911年
東磐井	13.6	7.9	6.2	21.4	4.0	3.2	6.0	27.1	19.5	6.8
刈田	24.1	19.6	(4.8)	(12.7)	2.5	2.3	1.6	0.0	40.9	6.0
伊具	19.7	22.8	9.0	14.7	3.4	4.7	6.0	5.0	33.1	6.6
本吉	15.0	9.8	6.2	16.8	2.3	2.1	3.7	2.0	14.7	10.0
雄勝	7.1	(4.3)	3.6	(3.4)	2.2	1.8	3.6	1.5	9.9	×
南村山	20.2	14.2	7.1	(3.4)	4.2	4.2	4.6	8.0	24.3	7.6
東村山	22.0	11.9	4.7		5.9	4.4	4.6		24.8	8.5
西村山	22.2	19.0	5.6		6.1	7.2	4.9		38.9	6.3
北村山	9.0	(3.7)	(1.5)		3.4	1.9	2.4		14.6	6.1
東置賜	18.6	11.2	15.3	23.0	6.4	5.4	17.0	33.4	26.2	6.5
西置賜	23.0	21.2	10.4		5.9	7.6	8.6		29.0	7.4
信夫	19.0	17.3	16.3	22.6	5.0	6.1	13.0	9.3	39.9	4.8
伊達	33.5	29.5	21.2	47.8	12.3	14.9	25.6	13.5	47.3	6.9
安達	18.5	20.2	13.4	22.8	7.4	10.7	16.3	7.0	31.8	5.9
安積	8.1	12.5	8.9	(5.8)	2.2	3.7	6.2	0.0	19.3	4.0
岩瀬	9.4	8.1	8.3	15.5	2.0	2.2	5.2	4.3	19.8	5.1
西白河	7.5	7.7	4.4	16.6	2.3	2.7	3.4	1.9	13.6	6.3
石川	14.7	19.5	3.1	(2.3)	3.1	5.1	3.4	2.0	16.8	8.9
田村	18.9	17.3	9.1	18.4	8.1	9.3	10.8	7.8	32.1	6.1

郡名	養蚕業指数 (貫)			産繭価額 比 (%)	産繭量 (対全国千分比)				桑園率 (%)	桑園反当 収繭量 (貫)
	1910年	1900年	1890年	1877年	1910年	1900年	1890年	1877年	1910年	1909年~ 1911年
双葉	12.9	9.9	5.0	(3.5)	2.7	2.4	3.1	0.0	25.5	5.6
相馬	13.7	11.6	5.2	(5.0)	5.0	5.6	5.7	1.5	22.1	7.0
東茨城	7.8	(4.5)	3.1	* (0.3)	4.0	3.0	4.6	* 0.0	10.8	7.1
新治	9.3	5.7	2.3	(0.6)	5.4	3.9	3.6	0.0	9.7	9.4
筑波	11.0	(5.3)	(1.4)	(0.9)	4.1	2.7	1.4	0.0	10.6	10.8
結城	10.1	7.6	(1.5)	(0.7)	3.8	4.0	1.8	0.0	10.3	10.9
勢多	23.9	27.5	11.6	26.9	7.7	12.7	12.5	9.2	29.5	8.1
群馬	41.3	39.0	13.9	28.8	15.9	20.9	16.6	16.2	37.3	10.2
多野	34.5	28.1	17.7	48.9	8.3	10.0	14.5	13.1	51.2	6.8
北甘楽	52.2	40.8	22.9	51.3	11.0	12.7	16.8	16.1	45.7	10.2
碓氷	38.1	34.9	17.0	32.2	7.2	9.3	10.7	8.0	43.9	8.5
吾妻	20.6	16.1	9.4	29.9	3.4	4.1	6.0	5.2	26.8	7.2
利根	18.0	28.9	8.5	23.1	5.1	11.5	7.3	6.2	43.4	4.4
佐波	31.1	26.8	14.5	23.1	6.9	8.3	10.6	10.7	24.2	11.0
新田	18.3	23.5	5.8	22.7	3.9	5.9	3.9	3.0	22.2	7.6
入間	21.3	19.3	6.0	11.6	14.6	18.8	13.5	10.6	18.4	12.5
比企	16.2	16.5	6.0	11.8	5.7	7.5	6.7	3.7	15.9	8.6
秩父	28.5	26.7	13.0	45.2	8.7	10.8	13.4	12.0	53.7	5.3
児玉	31.8	35.6	17.9	50.3	6.8	10.8	12.7	9.9	43.3	7.7
大里	25.2	19.0	11.1	28.7	11.0	12.0	16.5	12.8	23.5	10.9

北埼玉	11.3	5.9	(0.9)	* (1.0)	6.5	4.8	1.6	* 1.6	10.4	10.8
山武	13.2	6.9	(0.7)	(0.0)	7.0	4.9	1.1	0.0	10.9	11.5
印旛	8.4	(3.2)	(0.7)	(0.2)	4.7	2.3	1.1	0.0	8.5	10.3
匝瑳	24.3	((7.9))	(0.6)	(1.3)	4.4	1.9	0.0	0.0	14.8	14.2
西多摩	42.7	37.1	5.2	}	5.3	8.4	2.6	}	33.7	11.2
南多摩	30.7	29.8	22.0		8.1	6.0	10.3		18.6	14.9
北多摩	24.3	21.2	7.8	}	9.1	11.0	9.8	}	28.9	8.5
中	7.1	×	(2.2)		(0.2)	2.1	3.5		2.0	0.0
高座	14.4	×	8.1	28.3	6.2	9.3	12.6	10.9	24.5	6.2
愛甲	20.1	×	11.4	27.8	2.7	5.1	5.0	4.2	32.1	6.2
津久井	33.5	×	15.2	55.8	2.7	3.7	4.1	4.1	50.5	6.5
北魚沼	14.4	12.5	8.3	}	3.1	3.8	5.9	}	14.7	9.6
南魚沼	12.7	8.6	10.0		9.3	2.9	2.7		7.5	10.7
能美	7.1	6.0	10.6	13.5	2.8	3.5	13.5	10.3	7.0	×
大野	10.0	6.4	×	13.3	2.3	2.3	×	7.8	6.8	×
東山梨	48.0	23.4	19.8	* 43.4	8.3	5.8	8.8	* 15.6	32.9	14.5
東八代	44.1	22.9	19.1	* 50.4	6.1	5.1	8.5	* 19.4	39.4	10.9
南巨摩	10.8	7.8	((4.3))	}	2.0	1.8	1.8	}	10.7	10.4
中巨摩	27.3	9.1	3.4		5.2	6.0	2.7		2.4	2.7
北巨摩	19.4	7.2	4.9	}	5.0	2.6	3.9	}	18.6	10.8
南都留	18.5	35.1	9.5		43.8	4.8	11.6		7.4	16.5
北都留	24.3	35.0	16.3		3.9	6.6	7.2		44.7	5.5

郡名	養蚕業指数 (貫)			産繭価額 比 (%)	産繭量 (対全国千分比)				桑園率 (%)	桑園反当 取繭量 (貫)
	1910年	1900年	1890年	1877年	1910年	1900年	1890年	1877年	1910年	1909年~ 1911年
南佐久	33.5	27.9	11.4	} 16.3	8.1	8.5	8.4	} 7.1	22.0	13.2
北佐久	23.2	19.1	4.6		7.5	7.8	4.4		21.5	11.2
小 県	50.7	43.7	18.6	39.1	20.2	21.9	22.3	31.5	39.9	12.0
諏 訪	54.2	32.7	11.3	5.1	14.0	10.9	9.1	3.6	32.9	14.9
上伊那	37.9	18.0	9.7	} 15.6	15.3	9.5	12.1	} 17.8	25.9	14.2
下伊那	51.7	31.9	10.6		22.0	17.3	13.3		29.5	18.0
西筑摩	26.9	37.2	11.2	} 20.7	3.2	5.9	3.9	} 20.7	17.2	15.0
東筑摩	33.3	27.9	18.3		16.9	18.4	28.7		27.2	11.5
南安曇	29.1	28.7	9.9	} 5.0	5.8	7.3	5.8	} 3.5	29.1	10.5
北安曇	15.4	12.7	10.9		4.0	4.4	7.7		11.4	13.7
更 級	33.8	35.7	14.9	23.8	7.6	10.6	10.7	5.0	28.3	12.6
埴 科	65.7	58.5	32.7	17.3	6.4	7.8	11.5	8.6	48.8	14.1
上高井	41.0	37.6	9.7	} 12.6	6.7	8.2	5.2	} 16.2	25.4	15.2
下高井	17.4	16.3	7.7		3.9	4.7	5.4		11.2	14.2
上水内	15.1	15.9	4.8	* 6.0	7.1	9.7	7.1	* 3.9	12.4	11.4
稲 葉	24.1	×	12.8	(3.2)	5.4	3.2	10.0	3.1	14.9	16.1
本 巢	13.4	×	((3.3))	(1.2)	2.3	1.1	1.1	0.0	8.1	17.0
武 儀	20.5	×	10.4	11.8	3.6	4.1	5.7	8.0	15.5	13.6
郡 上	13.5	×	16.3	21.5	3.0	3.5	6.4	13.1	18.2	8.0
羽 島	29.5	×	((3.7))	(2.4)	3.9	2.6	1.7	1.3	12.3	22.3

加茂	22.7	×	8.3	5.3	4.3	1.0	4.9	3.0	22.2	10.3
可兒	27.1	×	7.8	(0.6)	2.5	1.6	2.2	0.0	21.4	13.0
惠那	47.1	×	10.1	(3.3)	8.9	5.9	5.7	2.0	26.2	17.6
益田	22.0	×	18.2	41.8	2.2	2.9	4.4	12.4	29.0	8.1
吉城	10.8	×	10.9	22.7	2.4	3.8	4.4	9.4	26.9	3.8
賀茂	21.7	13.5	(1.2)	(0.9)	2.5	2.0	0.0	0.0	26.9	7.8
田方	14.1	11.6	(1.3)	(0.9)	3.0	3.2	0.0	0.0	15.3	9.9
駿東	12.7	11.0	(1.4)	(3.0)	3.2	4.1	1.1	0.0	18.5	7.5
富士	8.7	(4.4)	(1.0)	(1.3)	2.5	1.8	0.0	0.0	12.2	7.0
磐田	14.6	8.2	(0.0)	(1.1)	4.9	4.8	1.2	0.0	7.7	15.3
浜名	22.3	13.3	(0.7)	(0.2)	8.3	6.9	0.0	0.0	11.8	18.3
引佐	21.5	(7.6)	(1.0)	(2.0)	2.5	1.1	0.0	0.0	12.6	16.8
東春日井	16.4	(2.0)	(1.6)	}	6.2	0.6	1.2	}	10.0	23.8
西春日井	9.0	14.7	(0.8)		2.7	3.3	0.0		10.4	21.2
丹羽	18.0	16.6	7.8	(1.7)	7.6	4.9	5.4	1.3	19.4	18.0
葉栗	22.9	20.7	18.8	—	2.5	1.8	3.9	—	21.4	19.9
中島	7.8	6.0	(0.5)	—	3.3	2.3	0.0	—	6.9	19.6
幡豆	10.9	10.4	(0.4)	—	7.6	3.2	0.0	—	12.7	20.3
額田	9.7	22.5	(0.7)	—	3.3	5.3	0.0	—	15.0	14.4
西加茂	13.2	10.9	(2.2)	(0.5)	5.2	2.4	1.1	0.0	21.6	13.8
北設楽	10.6	22.8	(5.6)	}	2.0	3.1	1.8	}	17.0	13.3
南設楽	12.3	(5.1)	(1.1)		(0.6)	2.0	0.0		0.0	17.1

郡名	養蚕業指数 (貫)			産繭価額 比 (%)	産繭量 (对全国千分比)				桑園率 (%)	桑園反当 収繭量 (貫)
	1910年	1900年	1890年	1877年	1910年	1900年	1890年	1877年	1910年	1909年~ 1911年
宝飯	19.8	8.6	(1.4)	—	8.8	2.3	0.0	—	27.5	16.7
八名	16.5	(12.5)	2.5	—	3.9	1.7	0.0	0.0	29.0	12.5
三重	9.6	(4.5)	(0.0)	(0.0)	3.0	1.9	0.0	0.0	8.1	11.2
三鈴	16.7	(7.4)	(1.7)	(0.0)	3.1	1.8	0.0	0.0	13.5	13.7
一鹿	18.9	7.6	(1.7)	(0.2)	5.5	3.1	1.7	0.0	11.7	15.8
阿山	10.2	(4.5)	(0.5)	(0.1)	2.1	1.3	0.0	0.0	7.1	15.0
名賀	16.8	(5.7)	(0.4)	—	2.6	1.3	0.0	0.0	11.5	15.0
阪田	19.6	23.1	25.2	22.3	3.6	6.0	15.3	10.4	14.8	13.7
東浅井	35.7	76.5	38.9	26.7	4.9	12.8	16.5	23.5	24.9	15.8
伊香	19.6	24.0	31.9	12.1	2.1	4.2	11.2	6.9	21.0	9.0
天田	28.3	15.6	16.0	8.5	4.3	2.3	7.6	5.5	32.3	9.5
何鹿	30.4	15.6	17.0	(2.8)	4.1	3.2	7.9	1.7	20.3	15.4
加佐	16.3	10.1	6.2	5.2	2.2	2.3	3.3	3.6	23.3	8.1
城崎	9.3	10.8	6.3	7.4	2.3	3.7	4.7	2.6	17.6	5.9
養父	28.3	30.4	19.7	4.0	3.0	4.5	6.8	13.2	42.9	7.2
水上	11.0	9.6	6.1	(2.3)	2.4	2.9	3.3	5.0	16.9	7.0
東伯	13.4	7.1	(2.0)	(0.2)	4.1	2.6	3.1	0.0	13.8	10.4
西伯	18.5	7.3	(0.7)	(—)	5.9	3.1	0.8	—	12.2	16.0
板野	11.5	(0.7)	(0.1)	(0.0)	2.7	0.0	0.0	0.0	10.6	10.8
喜多	10.5	(2.9)	×	(0.0)	3.5	1.4	×	0.0	8.7	12.3

東 和	10.5	(2.6)	×		3.0	1.3	×		10.8	10.7
北 宇	13.3	(4.1)	×		4.7	1.9	×		12.9	10.7
鹿 本	10.2	(3.4)	(0.6)	(0.2)	3.3	1.6	0.0	0.0	9.2	10.5
菊 池	10.0	(2.8)	(0.3)	(0.2)	4.6	1.7	0.0	0.0	9.4	10.5
全 国	6.9貫	5.4貫	2.3貫	4.0%	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	7.8	8.9

備考

(1) 1877年の産繭価額比は全農産物総価額中に占める繭価額の百分比を示す。

(2) 全国値は総産繭量を総耕地面積で除した値である。

(3) () 内の数値は養蚕業指数又は産繭価額比が全国平均値より低いことを表わし、当該郡が未だ養蚕地域になつていないことを意味する。

(4) 0.0は0.1%以下、—は皆無、×印は資料欠如、*印は郡域が著しく違うことを意味する。

(5) () 印は対全国産繭額千分比が2.0以下であるため、当該年次の養蚕地域から除外した郡。

と産繭量対全国比(千分比)を算出した。ところで、同年次の全国の総耕地面積と産繭量から算出した平均的な養蚕業指数は六・九貫となり、また、全国の総産繭量を千として、これを郡の総数で除した場合の近似値は大體二・〇となる。この値(二・〇%)は、各郡に同じ程度に養蚕業が発展している場合の平均的な産繭量対全国比を示している。

そこで、本稿では、養蚕業指数七・〇貫以上、産繭量対全国比二・〇%以上という二つの条件をみたす郡を養蚕地域と規定すると、第1表のように、岩手県東磐井郡以下の一二七郡が含まれる。更に、これらの郡を、養蚕業指数を指標にして、次の三つに分類する。すなわち七・〇貫乃至一四・九貫の郡を低位養蚕地域、一五・〇貫乃至二四・九貫の郡を中位養蚕地域、二五・〇貫以上の郡を高位養蚕地域とする。これらの養蚕地域の分布をみると、第1図および第2表のように、東山地方と関東地方を筆頭にして、東北・東海・近畿の諸地方では、数郡又は、それ以上の広域にわたる養蚕地域が成立している。殊に、東山、関東の両地方は、高位養蚕地域が連続的に分布し、明治末期におけ

第2表 地方別養蚕地域別の郡の頻度

養蚕地域		低 位	中 位	高 位	計
地 方					
東 北 関 東 北 東 東 近 中 四 九	北	9	11	1	21
	東	9	9	11	29
	陸	4	0	0	4
	山	4	12	16	32
	海	11	8	0	19
	畿	4	6	4	14
	国	1	1	0	2
	国	4	0	0	4
	州	2	0	0	2
計		48	47	32	127

ると、河岸段丘や扇状地上に立地するものが最も多く、山地または丘陵地がこれにつき、沖積低地の場合は濃尾平野の羽島郡と九十九里浜の匝瑳郡だけである。

中位養蚕地域は前者と異なって各地に広く分布している。北から述べると、東北地方では、山形・米沢・福島の諸盆地と二本松丘陵および阿武隈山地の一部に分布する。これらは当時における東北地方の代表的な養蚕地域を形成していた。関東地方では、高位養蚕地域の周辺部、すなわち、北方では、赤城・浅間・草津白根等の上州各地の火山山麓および利根川上流部の沼田段丘、東方では、比企丘陵と武蔵野台地に分布する。東山地方では、郡内地方と佐久、

る本邦の養蚕地域の核的存在となっていた。これに対して、北陸・中国・四国・九州の各地方は郡の頻度が少なく、その上、すべて低位型で、やっと、養蚕地域形成の萌芽が見られ始めたばかりである。

つぎに、各養蚕地域の分布の概要について述べてみよう。先ず、高位養蚕地域は東山地方の甲府・上田・諏訪・伊那・松本・長野の諸盆地と榛名火山南部山麓を北縁として南は多摩丘陵から丹沢山地にまで延びた関東西部山麓地帯を含む大集団を形成している。その他には、恵那山地と濃尾平野の一部、阿武隈川、由良川流域と琵琶湖北東部および九十九里浜の一部に散在しているにすぎない。これらの高位養蚕地域の地形的特長をみ

飯山の両盆地、美濃高原および濃尾平野の一部に分布し、前述した高位地域の間隙を満たしている。東海地方では伊豆半島、三方ヶ原台地、豊川流域および濃尾平野の一部に分布し、平野部に立地する傾向がみられる。近畿地方では、雲出川流域と上野盆地南部、琵琶湖北東部の姉川流域および由良川流域に分布する。なお、西伯郡は中国地方以西の唯一の中位養蚕地域となっているが、地形的には、大山火山麓と弓ヶ浜砂丘地帯に含まれる。

低位養蚕地域は阿武隈山地とその周辺の台地、越後南部山地、常総台地、相模原台地、富士山南麓、三河高原と矢作川流域低地、丹後山地、宇和山地および肥後台地に分布する。

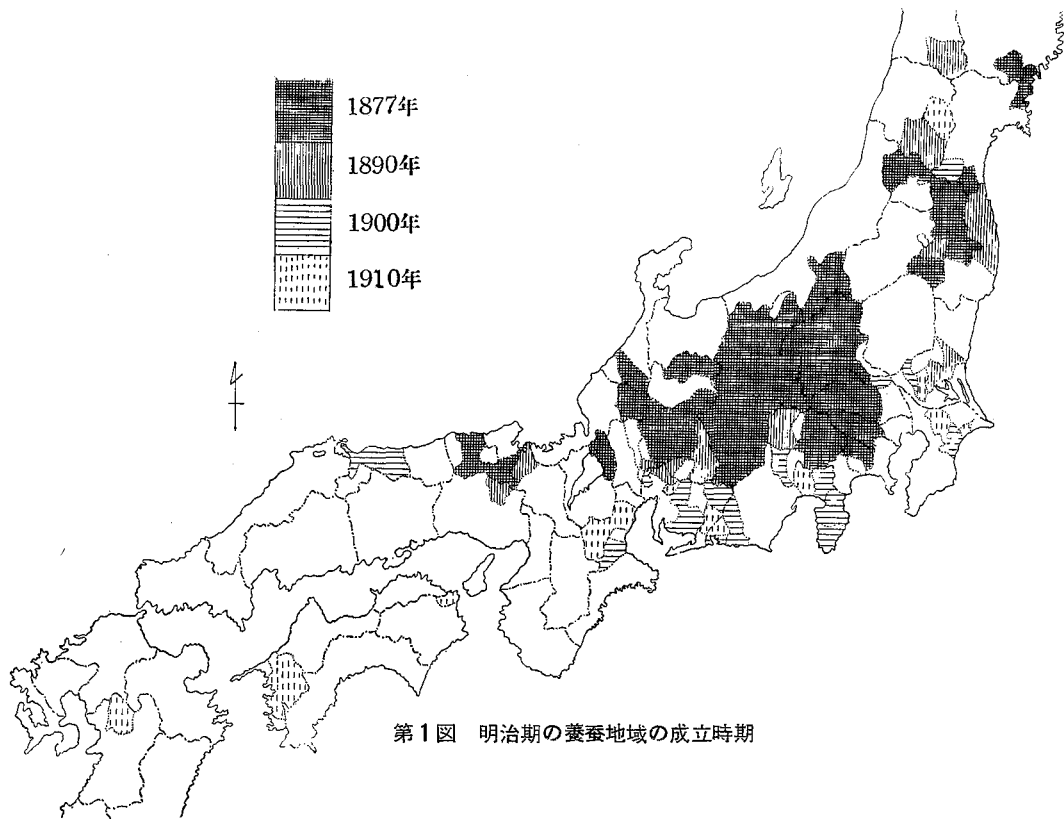
(四) 養蚕地域の成立過程

前述したように、明治末期の養蚕地域を形成していた郡は一二七であった(注)。これらの中には、古くからの養蚕地帯に含まれていたものもあるし、明治以降の実綿の衰退に伴って代わりに桑を導入した新興の蚕業地もある。ここでは、一九一〇年を起点として、一九〇〇年、一八九〇年と遡って、それぞれの時代における養蚕指数を算出し、更に、一八七七年の全国農産表の資料をも利用して、明治期における養蚕地域の成立過程を明らかにしてみよう。

(注) 資料上の制約から岐阜県の本巣、羽島両郡を除くので、以下は一二五郡となる(第3表)。

(1) 成立時期による養蚕地域の分類

まず、一九一〇年次と同じ方法を用いて、各郡の養蚕指数を算出すると、第1表のようなになる。全国の平均的養蚕指数は一八九〇年は二・三貫、一九〇〇年は五、四貫にすぎず、いずれも、一九一〇年次の値より小さい。すなわち、一八九〇年を基準にとると、一九一〇年の養蚕指数は三倍になり、この間に本邦の養蚕産業が著しく躍進し



第1図 明治期の養蚕地域の成立時期

第3表 成立時期より分類した地方別養蚕地域
(郡の頻度)

時 期	1877年	1890年	1900年	1910年	合 計
東 北	11	8	1	1	21
関 東	20	2	3	4	29
北 陸	4	—	—	—	4
東 山	24	5	1	—	30
東 海	—	2	12	5	19
近 畿	7	2	1	4	14
中 国	—	—	2	—	2
四 国	—	—	—	4	4
九 州	—	—	—	2	2
計	66	19	20	20	125*

*岐阜県の1900年の資料なきため、本巣・羽島両郡の成立時期を決定できないので、除いてある。

たことが判明する。更に、一八七七年の全国農産表の資料を用いて、産繭価額比（全農産物生産価額中に占める産繭価額百分比）を求めると、全国平均は四・〇%となる（注イ）。

これら各年次毎に、全国平均値以上に達している郡を養蚕地域（注ロ）とすると、明治末年当時の養蚕地域が何時、成立したかを知ることができる。

（注イ） 明治十年全国農産表には耕地面積の資料が無いので、産繭価額比を耕地一町当り収繭量の代りに使用する。
（注ロ） ただし、産繭量対全国比二・〇%以下の郡は除外する。第1表中（ ）でくくってある。

幕末から明治初期の実態を示すものと考えられる一八七七年の養蚕地域には六六郡が含まれる。従って、明治末期の養蚕地域一二五郡のうち過半数が、既に、明治初期又は藩政時代において、養蚕地域として成立していたことになる。これらは蚕業地としての歴史と伝統をもっている所が多いので、斯業の先進地域と呼ぶことができる。分布の中心は本州中部にあって、関東西部山麓地帯から東山地方の殆んど全域を蔽う大集団をなしている（第1図参照）。この他、福島盆地を中心とした阿武隈川の流域から米沢盆地

にまたがる東北地方南部の中規模の集団と、琵琶湖北東部の姉川流域と由良川、朝来川流域地帯、および魚沼山地と加賀山地に小集団が認められる。

これらの斯業の先進地域における明治末期における発展段階をみると、総数六六郡のうち、高位養蚕地域二九郡、中位養蚕地域二四郡、低位養蚕地域一三郡となる。従って、古くからの先進地域は明治末期においても養蚕業の発展が高度に達しているものが多く、相変らず、本邦養蚕業の核心地帯を形成していたものといえることができる。殊に、関東、東山の二地方はこの感が強い。しかし、東北地方と北陸地方では中位又は低位養蚕地域に停滞している郡が多い。すなわち、加賀山地と魚沼山地および阿武隈山地の一部では明治年代における斯業の発展が遅々としていたために低位養蚕地域にとどまっている。

一八九〇年に新しく養蚕地域に含まれるようになった郡は、山形盆地、阿武隈山地の一部、甲府盆地西部と身延山地、三河高原、濃尾平野北部等のように、前代の先進地域の周辺部に付着するような分布傾向を示す。つまり、先進地域の外延的拡大の結果形成された養蚕地域であることを暗示し、両者が連続して更に大きな養蚕地域が形成されてきている。勿論、地方別にみると、東海地方のように始めて養蚕地域が成立した所もあるが、これはいずれも、東山地方の前代の先進地域が南方へ拡大された結果生まれたものと考えられ、両地域は互に連続している。唯一の例外は、常総台地の一部で、利根川流域の非養蚕地域をはさんで、関東西部の養蚕地域の大集団との連続を断たれている。明治前期に成立したこれら新興の養蚕地域は、明治末期には、如何なる程度まで発達していたであろうか。

総数一九郡のうち、高位養蚕地域に三郡、中位養蚕地域に八郡、低位養蚕地域に八郡となり、先進地域に比較すると、概して養蚕業の発展が低い段階にとどまっている。このうち、興味深いのは、中位養蚕地域に属する山形盆地の

村山三郡の場合である。ここは米沢盆地（置賜地方）よりも遅れて養蚕地域となったのにも拘らず、明治後期における発達が目覚ましかったので、末期には、先進地域であった米沢盆地の諸郡と比肩し得る程になった。このように近接した地域において、養蚕業の発展速度に相違が見られるのは注目すべき現象である。

一九〇〇年に新らしく養蚕地域に発達した郡は二二郡ある。最も多く分布しているのは東海地方で、伊豆半島、三方ヶ原、三河高原の諸郡がこれに含まれる。その他では、九十九里平野と常総台地の一部および利根川中流部右岸の低地、大火山麓と弓ヶ浜に散在する。明治前期迄に成立した養蚕地域が山地または盆地に多く分布したのに対して、この時期の養蚕地域には台地または沖積低地に位置するものが多くなってきた。つまり、この頃から、養蚕地域の平野部への進出が目立ち始めたことになる。更に、分布の上に見られる著しい特長としては、従来先進地域から離れた地区に独立して存在する機会が多いこと、および中国地方にはじめて養蚕地域が発達し、西南日本への養蚕業進出の萌芽がみられたことである。

明治末期における発展段階をみると、低位地域が一三郡で過半をしめている。しかし、三方ヶ原台地や三河高原等の東海地方の諸郡では、養蚕業の普及発展が著しかったために、中位養蚕地域に含まれている所が多い。

一九一〇年になってやっと養蚕地域に含まれることになった新興地域は、常総、三重、肥後の諸台地と吉野川の河岸段丘、上野盆地および宇和山地に散在している。分布の特長をみると、前代にひきつづいて、地形的には台地または沖積低地へ、位置的には西南日本への養蚕業の進出傾向がはっきりと現われてきている。これらの養蚕地域は歴史が新しいのにも拘らず、養蚕業が短期間のうちに普及拡大した結果、例えば、三重台地の諸郡のように、北陸地方や東北地方の古くからの先進地域よりも高位の養蚕業指数を示す場合もある。

以上、明治年代をほぼ四期、すなわち、明治初期（一八七七年迄）、前期（一八九〇年迄）、後期（一九〇〇年迄）、末期（一九一〇年迄）に分けて、養蚕地域分布の概要を述べた。つきに、それぞれの養蚕地域成立の事情を明らかにしてみよう。

(2) 先進地域

これに含まれる養蚕地域は、近世において既に本邦の代表的な養蚕地帯であった所が多い。文化十一年に刊行された「養蚕絹節」によれば、当時の主要蚕業地としては、陸奥、羽前、下野、上野、武蔵、信濃、甲斐、美濃、飛騨、越前、加賀、若狭、近江、丹後、丹波、但馬の諸国があげられる^⑧。

また、文化十年の武州多摩郡の市町村々惣代が提出した歎願書には、

「一、武州多摩郡高麗郡入間郡秩父郡相州津久井郡甲州都留郡上州高崎藤岡桐生野州足利辺在々之儀は皆山附谷合之村々に而田畑狭く夫食不足に候得ば畠畑畔等之桑を植蚕飼仕、絹紬等下品之端物織出し売方之儀は所々之市を立………」

とあり^⑨、当時、関東山地および山麓の村々では田畑が狭くて食糧自給ができないので、畦畔に桑を植えて蚕を飼ひ、絹紬を織り、市を設けて販売していた様子がうかがえる。これらの資料に示された近世の養蚕業の立地条件の特長（山間地や河畔地に立地）や蚕業地の分布傾向はそのまま明治初期にひきつがれた結果、前述したような先進地域が形成された。ただ、近世後半期との大きな違いは、幕末の安政開港以降、生糸と蚕種の輸出が盛んになり、しかも横浜がその中心港として発展したことである^⑩。

その結果、「前橋および上田を二大中心地とする上州および北信地方、福島を中心とする岩代の北部、陸前、羽前の南部、甲州および信州地方」は影響を多く受けた^⑪。

なかでも、蚕種輸出の発展に刺戟されて、岩代、上野、信濃の各地における蚕種産地は著しく発展した。例えば一八七四年の一伊太利人の養蚕地方旅行日誌に

「武州上州何レモ利根川ノ兩岸ニテ蚕種ヲ製造ス此地ノ養蚕ハ日本中ノ最上ナルモノノミナラス併テ伊太利仏蘭西中ニモ亦見サル処ノモノナリ……中略……武州ニハ頗ル巧手ナル養蚕家アリテ殆ント蚕ニ担ナキニ至ル、該地ノ養蚕者ハ別ニ繁劇ノ事ナキヲ以テ専ラ養蚕ヲ業トス皆伊太利人ノ金ニテ家ヲ富マスト云該県下ニテハ養蚕家漸次ニ増加ス熊谷ノ統計表ニ記載スルモノヲ見テ知ルベシ

一八七二年 養蚕者 千二百四十八人
一八七三年 同 二千二百二十九人

前年ヨリ多キコト 八百八十一人

一八七四年 三千五百三人

如此増加シテ輟マサレハ五年ノ後ニハ其産物増スコト十倍ニ至ルベシ」⑩

とあるのをみても、明治初頭における利根川中流部の群馬県佐波郡と埼玉県大里、児玉兩郡下における蚕種生産の飛躍的な発展（伊太利人は五年間に十倍になると推定）の状態を知ることができる。当時、利根川南岸の中瀬、上手計、下手計、新戒、高島、血洗島等の村々（いずれも現在の太里郡豊里村）から生産された蚕種は五万〜六万枚の多きに達し、いづれも横浜港へ積出された。他の蚕種生産地もこれと同様に活気に満ち溢れていたものと想像されるが、好況は永續しなかつた。すなわち、蚕種輸出の有利性におぼれて粗製濫造にはしつた結果、自ら衰退を招くことになり、一八七三年乃至は七四年頃をピークとして年毎に輸出は減少していった。一八七七年という年は、正に隆盛を極めた安政以降の蚕種輸出が衰退へ向うのが決定的となり、また、旧式座繰による生糸の輸出も衰退していくという二重の打撃に襲われた時代である。

このような時代的背景の下に成立した先進地域の中心は近世以降の蚕種生産地によって占められていた。例えば、当時の代表的な蚕業地であった伊達、置賜、多野、佐波、小泉等の諸郡はいずれも近世における蚕種生産地であり^④、^⑤^⑥^⑦、安政開港以降更に一層の発展を遂げた地方である。これらの事例は、明治年代の代表的な養蚕地域は近世後半期以降の蚕種産地を中心にして形成されてきたことを良く表わしている。

これに反して、丹波、丹後、但馬、近江、飛騨、越前、加賀などの諸地方は近世後半期以降の伝統的な蚕業地であったのにも拘らず、横浜港から遠く離れていたために、生糸および蚕種輸出の影響を受けることが少なく、その後の発展も停滞していた。例えば、飛騨山地についてみると、明治初期の斐太後風土記によれば、吉城郡古川町方村（現在の古川町）の項に^⑧、

「蚕飼はこの村に限らず、國中村々押立て百年前に競ひては一階にもなりぬべし、此の村にては糸ひき紬を織り、真綿を製て生計とす、郷中及他郷よりも繭を買てしかせり……中略……桑は川の東北方に能く応ひて当村は殊に繁茂せり」

とあり、当時、吉城郡一帯では養蚕がかなり普及していて、古川町方村へは周辺の村々から繭が出荷されたこと、宮川沿いの土地に桑が多かったことなどが示されている。しかし、この地方の養蚕の発展速度は極めて遅く、百年前に比してやっと二倍になる程度にすぎず、前述した利根川中流部の目覚ましい発展に比較して、極めて停滞的であった。他の地方もこれと同じような経過を辿ったものと推定される。その結果、第1表に明らかなように、吉城、能美、大野、東浅井、養父などの諸郡は養蚕地域としての地位を逐年低下していった。

(3) 明治前期の新興地域

蚕種輸出の急激な衰退と旧式座繰から改良式座繰への転換および洋式器械製糸技術の導入、生糸輸出の発展^⑨など

によつて特色づけられる時代的背景の下に成立した当時の養蚕地域は、立地条件や歴史的伝統などの点よりみると、次の二つに分けることができる。その一つは、前代に成立した先進地域と類似した特長を持った地域で、山形盆地、阿武隈山地、恵那山地および由良川流域に分布する。そのうち、山形盆地についてみると、山形県農事調査書^⑧によれば、

「県下蚕糸業の旧且つ盛なるは置賜地方とす、いまこの起源を索むるに、この由来する所極めて遠く、その年月詳ならずと雖も云々……中略……明和年間藩主上杉治憲大に心を殖産に勞し、富国の大本を定む、国老竹股某又深く國産奨励の忽にすべからざるを感じ、治憲を輔けて國産の隆興を図れり、即ち、養蚕家に資本を貸付し、或は養蚕手引草を著はし四民に頒布し以て蚕業を奨励せり、……中略……置賜地方蚕糸の業盛なるに従ひ、漸く隣郡を風化し、村山、最上の各郡に於ても蚕糸業に従事する者漸く増加せり、降て明治初年海外貿易の途愈々開け生糸蚕種の輸出益々盛なるに及び其収益昔日に倍徒するを以て人々其製造に従事……以下略」

とあり、村山地方が置賜地方の蚕業の発展に刺戟されて後から蚕業を導入したこと、明治初期の蚕種輸出の発展に伴つて、蚕種製造業者が増加した様子がうかがえる。置賜地方は先進地域に、村山地域は明治前期の新興地域に区分されるけれども、上述したようにこの両地域の間には構造上の大きな差はなく、明治初期の代表的作物はいずれも桑であった^⑨。

これに対して、常総台地と濃尾平野の一部には、文字通り新興の養蚕地域が成立した。一八七七年の資料より代表的な特用作物を求めてみると、茨城郡は菜種、新治郡および丹羽、葉栗両郡は実綿となつていて^⑩、当時これらの地方では未だ養蚕は極めて不振であつた。すなわち、産繭価額比についてみると、茨城郡は〇・三%、丹羽郡は一・七%、葉栗郡は皆無であつた。なお、甲府盆地西部の巨摩郡は明治初期においては実綿が代表的特用作物で、繭は第二

位となっていて、両者が併存していたが、類型上は、新興地域に類似する。

(4) 明治後期の新興地域

明治後期は器械製糸の確実な発展と製糸業の輸出産業としての地位の確立および秋蚕の普及のはじまりなどによって特長づけられる^⑧。特に、秋蚕は労力配分上、稲作の繁忙期とちか合うことが少ないために、その普及は、養蚕業の水田地帯への進出を可能ならしめた重要な条件となったことに注意せねばならない^⑨。当時における全国の蚕期別産繭比率の推移をみると、一八八六年には、春蚕七二%、夏蚕二四%、秋蚕四%であった。一八九〇年においてもその比率は殆んど変わらず、それぞれ、七三%、二一%、六%となっていた。その後、徐々に秋蚕の比率が高くなり、一八九五年以降は一〇%をこえるようになった。その結果、一九〇〇年には、春蚕七四%、夏蚕一四%、秋蚕一二%となった。

一方、明治維新以降資本主義の農村への滲透に伴ってひきおこされた自給作物、工芸作物の衰退もはっきり現われてきた。その契機をなしたのは、一八九六年の輸入綿花に対する関税の廃止であった^⑩。これによって、国内産の実綿の衰退は決定的となり、従来の綿作地は新しい商品作物を導入する必要にせまられた。

こうした時代を背景にして成立した養蚕地域は明治初期にはどのような農業構造を示していたであろうか。一八七七年の全国農産表によって、当時の代表的作物を求めてみると、実綿と米が多い。すなわち、結城、南巨摩、西春日井、中島、幡豆、額田、西加茂、宝飯、西伯の九郡では実綿が、又、北埼玉、山武、賀茂、田方、駿東、東伯の六郡では米が代表的作物となっている^⑪。その他には、繭、甘蔗、茶、菜種、煙草が代表的作物となっている郡が一つづつあるにすぎない。

そのうち、三河地方の各郡と西伯郡は、明治初期には繭の生産は殆んど皆無であったのにも拘らず、僅か二〇年の間に、養蚕業指数が一〇・〇貫以上に達し、産繭量対全国比も三・〇し五・〇%に達したことは、正に驚異的な発展である。例えば、幡豆郡と額田郡の明治十年の実綿産額はそれぞれ二七八万斤、一六九万斤で、全国実綿総産額九四四七万斤の二九・三%、一七・九%を占め、養蚕業における東浅井郡（二三・五%）や北甘楽郡（一六・一%）に對比される綿作の中心地であった。

(5) 明治末期の新興地域

この時代も、前代と同様に、生糸輸出の一層の発展、器械製糸の発展、秋蚕の普及、実綿その他の工芸作物の急激な衰退と桑の激増によって特長づけられる^②。

このような時代の背景の下に成立した新興地域は当時としては最も新しい養蚕地域で、明治初期においては、養蚕は極めて不振であつて、実綿（筑波、東春日井、八名の三郡）や菜種（三重、鈴鹿、阿山、名賀、菊池の五郡）をはじめとして、茶（富士、鹿本両郡）、煙草（中、南設楽両郡）、藍（匝瑳、板野両郡）などの様々な工芸作物が代表的な作物となつていた。これらの諸郡はいずれも、明治初期の特用作物が後期以降衰退していった跡作物として桑が進出した地域で、地方別にみると、東海以西の西南日本に、地形別にみると、台地または低地に位置するものが多かった。

(五) 明治末期の養蚕地域の蚕業構造

以上、主として養蚕業指数の発展段階にもとづいて、本邦の養蚕地域成立の概要を述べた。最後に、養蚕業指数の

構成要素である桑園（耕地面積中に占める桑園の比率）と桑園反当取繭量を用いて、明治末期の各養蚕地域の性格を明らかにしよう。

第1表から判明するように、桑園反当取繭量は地方毎にかなり良くまとまっている。例えば、東北地方の各郡は大部分が五・〇貫〜九・〇貫の間にあり、九地方の中で最低である。関東地方の諸郡は養蚕地域としての成立時期や地形的条件の相違に依じて、利根郡の四・四貫を最低として、最高の匝瑳郡の一四・二貫に至るまで、かなりの差があるが、七貫〜一一貫の間に在る郡が多い。東山地方も同様に変化に富んでいる。すなわち、山地に所在する南都留郡の三・七貫を最低として、最高は羽島郡の二二貫に及ぶが、概して、一〇貫〜一五貫の郡が多い。東海地方は、東部の伊豆半島から岳麓地方にかけては、七貫台の郡が多い。一方、西部の三方ヶ原、三河地方、濃尾平野の諸郡はこれより遙かに高水準に達し、東春日井郡の二四貫を筆頭として、一五貫〜二〇貫の郡が多く集まっている。ここは当時、本邦養蚕地域の中で最高の生産力水準に達していた。近畿地方では、三重台地と姉川流域は、東海地方に匹敵する水準にあったが、由良川、朝来川流域の三丹地方は一〇貫以下の低水準の郡が多かった。中国、四国、九州の各地方は一〇貫内外の郡が多く、新興の養蚕地域であるものにも拘らず、生産力水準は割合に高い。

一方、桑園率についてみると、秩父郡の五三・七％を筆頭にして、最低は大野郡の六・八％に至るまで、様々である。分布の特色としては、地方による差が大きいと同時に又、同一地方でも山地と台地または沖積地などの地形的条件による相違が著しい。すなわち、地方別にみると、東北、関東、東山の三地方で高く、東海、近畿の両地方およびそれ以西の地方で低い。つまり、東北日本で高く、西南日本で低い傾向が認められる。又、地形別にみると、例えば関東地方では、秩父、多野、北甘楽、利根、津久井等の山地郡は何れも四〇％以上の高率を示すが、北埼玉、結城、

第4表 中位養蚕地域の蚕業構造

地方名	郡の数	桑園率 (1910年)	反当收繭量 (1909~1911年)
東 関 東 東 近	北	11	30.5%
	東	9	25.8
	山	12	20.7
	海	8	19.9
	畿	6	15.1
			6.9貫
			8.6
			9.9
			16.7
			12.1

筑波、山武、新治、印旛、匝瑳などの洪積台地または沖積低地の諸郡は一〇%乃至はそれ以下の低率に止まっている。以上、述べたように、桑園反当收繭量は濃尾平野において最も高水準に達し、ここから東北方向または西南方向へ遠ざかるにつれて順々に低下していくのに対して、桑園率は東北日本に高くて西南日本に低く、その上、地形別には山地で高く台地や低地で低いという傾向を示している。こうした分布傾向の多様性は、養蚕業指数の分布を複雑にさせる原因となっている。

養蚕地域全体について、養蚕業指数と桑園および桑園反当收繭量の結合関係を述べるのは繁雑になるので、ここでは、中位養蚕地域をとり出してみよう。中位養蚕地域に含まれる各郡の桑園率と桑園反当收繭量の平均を求めると、第4表のようになる。すなわち、養蚕業指数一五・〇貫〜二四・九貫の中位養蚕地域の構造をみると、東北地方では、三〇%の桑園率と七貫の反当收繭量より構成されている。以下、関東では二六%、九貫、東山では二二%、一〇貫、東海では二〇%、一七貫、近畿では二五%、一二貫となり、前述した桑園率と反当收繭量の分布の地域性が明瞭に現われてくる。高位養蚕地域と低位養蚕地域についても、これと同様な傾向が認められる。蓋し、同一地方についてみれば、中位養蚕地域の桑園率が高くなると高位養蚕地域に、低くなる低位養蚕地域に転ずる場合が多いからである。

以上の考察から、本邦の養蚕地域は構造的特长よりつぎの三つに類別できる。

第5表 各地域類型の代表例

地域型	郡名	蚕期別産繭比率(%) (1911年)			立通桑園率 (%) (1910年)
		春 蚕	夏 蚕	秋 蚕	
東 北 日 本	伊 達 東 利 置 賜 根	65.6	0.3	34.1	2.3
		69.8	8.4	21.8	83.8
		75.3	24.7		48.5
東 山	東 小 上 伊 山 梨 伊 那	64.3	1.0	34.7	×
		59.7	15.9	24.4	×
		41.9	33.8	24.3	×
西 南 日 本	丹 羽 東 浅 何 井 鹿	54.8	23.1	22.1	×
		48.8	44.1	7.1	13.2
		56.1	8.8	35.1	39.2

その一つは低位の生産力水準と高位の桑園率の結合した型で、東北、関東の両地方に広く分布する。これを東北日本型と呼ぶことにする。他は、高位の生産力水準が中位または低位の桑園率と結合している型で、濃尾平野を中心として東海、近畿地方に多く、中国、四国、九州の各地域はその萌芽形態と考えることができる。これを西南日本型と呼ぶことにする。この中間の型、つまり、中位または高位の生産力水準と中位または高位の桑園率とが結合しているのは、東山地方に多いので、東山型と呼ぶ。

このような地域類型を分化発生させた条件としては養蚕地域として成立した時期の新旧、桑園の仕立法、蚕期別産繭比率などが考えられる。いま、各類型の典型的な例として、伊達、東置賜、利根（以上東北日本型）、東山梨、小泉、上伊那（以上東山型）、丹羽、東浅井、何鹿（以上西南日本型）の九郡を選び出すと第5表のようになる。すなわち、東北型の諸郡では、立通桑園が多くて、年間の産繭量の七割内外が春蚕期に生産されているために、生産力水準は低くなっている。これに対して、東山型と西南日本型では夏秋蚕期の産繭量が全体の五割またはそれ以上に達していることが生産力水準を高くさせたものと考えられる。資料的な裏付けはできないが、

東山型と西南日本型の各郡は若干の例外を除いて、根刈桑園が大部分を占めていることはいうまでもない。成立時期よりみると、東北日本型と東山型は古い伝統を有する先進地域で、西南日本型は新興の養蚕地域である。

(六) 結 語

以上、養蚕業指数という新しい指標を用いて、明治年代における本邦養蚕地域の成立過程の概要を考察した。その結果、つぎの諸点が明らかになった。

- (1) 明治年代における養蚕地域の分布の中心は東山地方と関東地方西部にあり、西南日本への進出は未だ顕著でなかった。
- (2) しかも、成立時期についてみると、明治初期またはそれ以前の時代に属する郡が全体の過半を占めていた。
- (3) これら先進地域のうちの核心をなしたのは近世後半期以降の伝統的な蚕種地帯であった。
- (4) 養蚕地域の成立過程と地域の蚕業構造の特長から、明治年代の養蚕地域は、東北日本型、東山型、西南日本型の三大類型に分けられる。

参 考 文 献

- ① 土屋喬雄 続日本経済史概要 一五六頁
- ② 新井寿郎 明治年代における桑園の発展 埼玉大学紀要第五卷 一九五六年
- ③ 農林省統計調査部 養蚕に関する基礎資料 一九六一年

- ④ 新井寿郎 埼玉県の養蚕地域の変貌 埼玉大学紀要第十二卷 一九六三年
- ⑤ 新井寿郎 本邦養蚕業の生産力の地域的発展 埼玉大学紀要第十卷 一九六一年
- ⑥ 本位田祥男・早川卓郎 東亜の蚕糸業 一九四三年 二九頁
- ⑦ 齋藤叶吉 山形県における桑園分布の変化 地評第三〇卷第十一号 一九五七年 一七頁
- ⑧ 高橋亀吉 日本蚕糸業発達史(上) 一九四一年 一七九〜一八〇頁
- ⑨ 前掲 ⑧ 一七九頁
- ⑩ 前掲 ⑧ 五七〜七〇頁
- ⑪ 前掲 ⑧ 一一〇頁
- ⑫ 農林省 農務顛末 第三卷 一九五五年 一〇一二頁
- ⑬ 新井寿郎 明治以降の埼玉県養蚕業の推移(埼玉県蚕糸業史第一篇第二章第一節) 一九六〇年
- ⑭ 庄司吉之助 明治維新の経済構造
- ⑮ 高橋幸八郎・古島敏雄 養蚕業の発達と地主制
- ⑯ 山形県 明治廿一年山形県農事調査書
- ⑰ 群馬県蚕糸業史編纂委員会 群馬県蚕糸業史(下巻)
- ⑱ 農業発達史調査会 長野県養蚕業史 一九五一年
- ⑲ 富田礼彦 斐太後風土記卷之十一(大日本地誌大系)
- ⑳ 前掲 ⑧ 三五一〜三五三頁
- ㉑ 前掲 ⑩
- ㉒ 前掲 ②
- ㉓ 前掲 ②
- ㉔ 前掲 ⑧ 四五六〜四五九頁
- ㉕ 前掲 ⑥ 七九頁
- ㉖ 前掲 ① 一五五〜一五六頁
- ㉗ 前掲 ②

②⑤ 前 掲 ① 二三七～二五七頁
②④ 前 掲 ②

(追記)

第1表中、次の各府県は一八九〇年又は一九〇〇年の資料が入手できなかったため、近い年次の資料を利用した。()内はその年次を示す。

岩手県(一九〇一年)、茨城県(一八九二年、一九〇一年)、新潟県(一九〇二年)、石川県(一九〇一年)、福井県(一九〇二年)、三重県(一九〇一年)、愛媛県(一九〇一年)。